

のを見つけてきました。そこはあんまり大きいのは釣れなかつたんだけれども、いくつも釣れる。そこで毎朝行ってたわけです。そしてら橋の上で、一人のおじいさんが毎朝ながめているわけです。五時頃からでした。欄干によりかかって、そのうちおじいさんは、自分で釣ってみなくなつたんですね。或る朝私は時間どおりに行ってみたら、私の場所でおじいさんが釣っているわけです。

そこは、やぶが繁っていて、私が時間をかけて、やっと人間がひとり腰を下せる位に切り開いたので、並らんで釣るというわけにはいかない。そこで、よし、明日はと思つて、三十分ばかり早く行ってみると、又、おじいさんが来たばかりのところで、私が遅れてしまった。

そこで、その次は又三十分ばかり早く行ってみたら、また、おじいさんが来ている。そうやってだんだん早くなつて、しまいは三時頃になつてしまつた。そして或る日、出島の方へ行く用があつて、代りに叔父さんがその場所へ行くことになつたんですが、そしてら例のおじいさんはもう来ていたそうですよ。私はもうあきらめておじいさんに席をゆずつてしまつたわけです。そしてすっかり忘れていたんですが、或る日釣道具屋さんへ行って、ふとそのおじいさんの事を思い出して、どうしたかなと思つて店の人に聞いてみたら、そのおじいさん、体の無理が

たつたせい、眼が見えなくなつて、その時はもう家の中に寝たきりの生活をしてしていると聞きました。気の毒なことをしたと思ひますが、忘れられない思い出です。

ところが、釣り落した魚は大きいと言いますけど、全くどうにもならないで糸を切られたというものは何度もありません。まるで米俵か棧にひっかけたようなものすごい手応えがあるんですが、そのせいでない証拠に、どんどん動いていく。そしてぶつんと糸が切られてしまふ。

当時は秋田糸といつて、絹糸をより合わせて、うるしをかけたものなんですが、そのうち一番太いのを使つていました。それでも今みたいにナイロンと比べると弱いから、三貫目もあるのにかかられると切れたんですね。

当時虫掛の橋の上に流木止めがあつて、その下のところは流木止めを安定させるため丸太でくくつてある。その下に流れてきた板だの、よしだのが引つかかつて、網みたいになつている。その下にとつともない大きいのが居るんだと言われていました。天気の良い水の澄んだ時などは、上の方に小さな魚が泳いでいて、一番底には巨大な鯉がじつとして居るのが見えるんだというのを土地の人が話していました。その虫掛でも何度も糸を切られましたよ。鯉に糸を切られて尻もちをついたことありました。